

今年登場するカメラを大予言! / ソニーα1IIの高性能で何が撮れる!?! / 冬景色の光活用術

キャパ

2

FEBRUARY
2025

一眼カメラブーム
来たる!?

各社動向と
期待の次世代機を大胆予想

2025年の新型カメラ 大予言

色彩と立体感が
こんなに際立つ!
斜光&逆光を
フル活用する
冬景色撮影術

自信作でもナゼ入選しない?
審査員が明かす傾向と対策
必勝!
フォトコンテスト
上位入賞への道

5010万画素+最先端AF+
秒30コマ連写+プリ撮影

ソニーα1II

「高画素+高速性能」が
可能にするもの

高速性能を備えた
SLシリーズ最新モデル
ライカSL3-S

注目のレンズ実写検証
キヤノンRF28~70ミリF2.8 IS STM
RF70~200ミリF2.8L IS USM Z

Cover Girl
尾碕真花

回顧展から
新進作家まで、
私的ベスト10!

2024年の写真展を 振り返る

西垣仁美

日本大学芸術学部写真学科主任。
学部および大学院の授業を担当。
専門は近現代の写真表現・写真家
研究。写真とは何か、写真の芸術
性とは何かを探究中。著書に「超」
写真表現力 カメラワークの新思
考法」(共著、青弓社、2019年)
など。日本写真芸術学会副会長。



人々の自由な往来が活発化した2024年。
印象に残る写真展もまた数多く開催され
た。写真研究者・西垣仁美さんに、その
一端を振り返ってもらった。文/西垣仁美



© 池田記念美術館

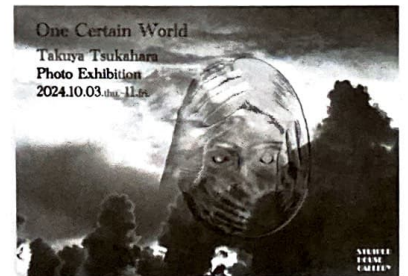
北井一夫 写真の旅人

2024年5月25日(土)~7月7日(日)

北井一夫「写真の旅人」ポスター



From
Kiryu #1
2020年
© Miyako
Ishiuchi



「ある一つの世界」DM



© Hiroki Urabe

写真と時間の「重み」

北井一夫「写真の旅人」

(アートスペースシモダ 所蔵写真展)
5月25日~7月7日
池田記念美術館

日大全共闘や三里塚、沖縄を取材し
た初期のドキュメンタリー作品から日
本の各地を訪ねて人々の暮らしや風景
を撮影したシリーズ、第1回木村伊兵
衛写真賞を受賞した「村へ」や中国の
写真などで幅広く構成。その多くの作
品がヴィンテージプリントで、少しく
りムがあった色合いにより時の流れ
を感じさせられ、当時の北井の気持ち
に思いを馳せた。またこれらの作品を
一人のコレクターが収集し、保管して
いるということに驚きを隠せない。物
としての写真の価値をあらためて考え
させられた。

石内都「石内都

STEP THROUGH TIME」

8月10日~12月15日

大川美術館

7月にアルル国際写真フェスティバ
ルで「ウーマン・イン・モーション」

フォトグラフィー・アワードを受賞し
た石内のデビュー作から初公開の最新
作「ONE SUM」までを一堂に会し
た大規模な写真展。石内の歩んだ写真
家人生、作品の流れなど全貌をつかめ
るものであった。石内が自らプリント
した初期の作品や写真展のポスターな
どヴィンテージ作品が多数展示されて
いるのが圧巻。銀が浮き、端が破けた
ような写真に歴史の重みをより感じる
ことができ、物としての写真の力強さ
が伝わってきた。

塚原琢哉「ある一つの世界」

「重工業地帯の終焉」

10月3日~11日

ストライプハウスギャラリー

1937年生まれの塚原が最終写真
展と位置付けた展示。特に'66年~'68年
制作の「ある一つの世界」は驚きを禁
じえない。テーマは、高度経済成長期
の最中に自然と人間の共生が崩れてい
くことへの危惧。フィルム時代に合成
技術を駆使してこれらの作品が制作さ
れたことに感嘆した。当時はまったく
日本で評価されず、海外での評価が先
だったそうだ。

表現の可能性を探る

浦部裕紀「空き地は海に 背を向けている」

6月28日~7月21日

コミュニケーションギャラリー
ふげん社

3・11には多くの写真家がそれぞれ
の方法で向き合ってきたが、2020
年にふと被災地と向き合い始めた浦部
の方法は独自である。現地に赴き撮影
した写真と東京で当時の映像を見直し、
モニターを撮影。その際、長時間露光
や早送り、一時停止、カメラの移動な
どの手を加えている。メインビジュア
ルはインパクトがあり目を引きつけら
れた。静と動の画像が相乗効果として、
震災について時の流れや土地の変容、
人間の心情など多くのことを考えさせ
られた。

オノデラユキ「Parcours — 空気郵便と伝書鳩の間」

11月2日~12月8日

WAITING ROOM

オノデラの2年ぶりの新作である。
展示会場がもと郵便局であったことに



《スリーマイル島原子力発電所》《チェルノブイリ原子力発電所》
《福島第一原子力発電所》〈正しさの場所〉シリーズより
© Hiroshi Ono, courtesy
KANA KAWANISHI
GALLERY



オノデラユキ「Parcours - 空気郵便と伝書鳩の間」
展示風景 (2024年・WAITINGROOM)
© Yuki Onodera, courtesy of the artist and
WAITINGROOM



「AABUKU」
展示風景



「ONSEN #008」
© Yusuke Yamatani, Courtesy of Taka
Ishii Gallery Photography / Film

着想を得て「通信」と「情報伝達」をテーマにパリと東京をつなぐ壮大な仕掛けの写真展。巨大なコーラージュ作品や、実際にパリで投函され、郵便スタンプを押されたオノデラのプリントの展示。'84年まで使用されていたという空気郵便と伝書鳩がモチーフであり、情報を運ぶ赤いラインが会場の壁に描き出され、そこに大小の作品が配置されており印象深かった。

山谷佑介「ONSEN」

11月15日〜12月14日

タカ・イシイギャラリー
フォトグラフィック／フィルム

野湯を探し浸かる目的で集まった面識のない仲間の一時の冒険。平安の昔からあったという湯や水辺でのコミュニケーション。日本の景色というより未知の星のような不思議な空間。時空を超えた世界が表現されているようであった。セラチンシルバープリントのみならず、ルーメンプリント、道中の会話の一部を文字化された野湯で現像したフォトグラムなどは力強く美しく、大小取り混ぜたそれらをリズムミカルに配置した印象的な展示であった。

社会への問い

鈴木萌「AABUKU」

2月10日〜25日

Reminders Photography
Stronghold Gallery

鈴木が3年をかけリサーチし、関係者の声を集めた沖縄県における「有機フッ素化合物」(PFAS) による環境汚染をテーマにした作品。目に見えず匂いもしないその物質は自然界でも体内でも永遠に分解されない発癌性物質

で、汚染された浄水場からの水は45万人に供給された。水をめぐる沖縄の日常風景、その土地に住む人の写真と彼らの言葉、一杯のコップ。言葉がなければわからないが知れば恐ろしさが伝わる重い写真展であり、写真の伝える力を感じた。

小野博「正しさの場所」

8月9日〜9月14日

KANA KAWANISHI
PHOTOGRAPHY

アムステルダム在住の小野が、5年間かけて撮影した世界のとある場所の写真が数枚並列に展示されている。しかし添えられた文字を読み、そこがどういった場所であったかを知ると写真の見え方が変わる。テーマは「正しさとは何か」という難しい問題である。それぞれの立場によって、正しさは変わる。関連するような場所を並べ、写真と文章の相乗効果により本当の正しさとは何かを問いかける。その場で起こった出来事を知らなければ、あるいは忘れていけば静謐な日常風景であり、それはいつしか記憶から消えていく怖さを感じさせられた。

偉業を振り返る

安井仲治「生誕120年 安井仲治 僕の大げな写真」

2月23日〜4月14日

東京ステーションギャラリー

安井は戦前に活躍したアマチュア写真家。当時はアマチュアが自由に新しい表現を追求した時代で、その活動を牽引したのが安井である。天折するまでの20年ほどの間に、驚くほど変化に富んだ手法、技法、被写体などで新し

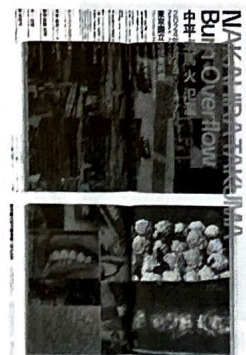
い表現に果敢に挑戦した。膨大なヴィンテージプリントとコンタクトシートなど豊富な資料から、安井の卓越した力をあらためて知ることができた。被写体は100年前の世界ながら、写真は現代においても違和感なく、普遍的な魅力を放っていた。

中平卓馬「中平卓馬 火一氾濫」

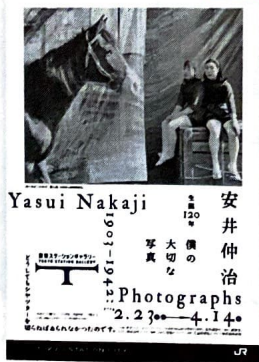
2月6日〜4月7日

東京国立近代美術館
編集者、写真家、評論家として活動

した中平卓馬の、20年ぶりの初期から晩年までの仕事を丁寧にたどった大回顧展。実践と理論ともに大きな足跡を残した中平の全貌を約400点の作品と資料であぶり出した。ヴィンテージプリントの展示や、かつての展示の再現、そして膨大な雑誌や資料を読ませるように展示しているのが印象的であった。常に思考し、写真に向き合い、社会や写真を考え続けた中平。彼が何者であり、何を求めたのか、それは鑑賞者それぞれに委ねられ、大きな意味で「思考せよ」と言われているようであった。



「中平卓馬 火一氾濫」
リーフレット



「生誕120年 安井仲治
僕の大げな写真」リーフレット